

疲弊する 近代

日常生活における重層性と軋轢

井腰圭介・井出裕久

問題意識と視角、課題

近代／モダン という用語は、これまで社会科学的問題設定の中心に位置づけられてきた主題であった。たとえば『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』をはじめとする所謂社会科学の古典的著作は、総じてこの 近代／モダン の特性の解明に捧げられた諸研究だと言っても過言ではない。この時、近代／モダン とは、研究者自身が巻き込まれている状況の特性の総称であり、「どこから来てどこに往くのか」という方向性をピン止めするための暫定的な標識でもあった。こうして現在進行形で果てしなく続くかにみえる 近代／モダン の特性と方向性を割り出すために数多くの研究が試みられ、著作として公表された内容が、再び 近代／モダン の状況に照らし返されて、さまざまな評価を受けてきた。現時点で明らかなことは、近代／モダン 研究は単に対象を究明するだけではなく、意図的であれ結果的であれ、研究自身が巻き込まれている状況を変化させる実践的な営みでもあったということである。

このような 近代／モダン に対する認識から、本趣意書では、極めて形式的に、意識と存在の絶え間ない還流を目指した運動 という点に 近代／モダン の特質を見る立場を設定したい。そのうえで、本企画では、「疲弊する 近代」という主題によって、次のような問題提起を試みたい。

意識と存在の絶え間ない往還を目指した運動 という点から 近代／モダン を見ると、この往還運動が現状で終息しているとはいえない。しかし、以前のように、典型的には合理的な官僚制に結晶化していったような、明確に意識され計算された規則の制定とそれに基づく現実の規則的な改変といった明確な形での往還運動が展開されているともいえない。「疲弊」とは、意識と存在の往還運動がさまざまな綻びを見せつつ、今なお持続している様子を表現したものであり、本シンポジウムは、こうした投企的な主題を検証することを目的とするものである。

主題の検証は、ごくありふれた身近な日常生活の諸現象に照準を合わせながら進めたい。それは 近代／モダン の現在を、より具体的な内実を伴った水準から掘り起こし、検討する必要があると考えるからである。特に日本の 近代／モダン の議論は、これまで多くは「封建遺制からの脱却」といった歴史的な文脈によって支えられてきたと考えられる。この結果、日本の 近代／モダン に対する研究は、長らく「個人の主体性の確立」・「近代家族の形成」・「産業化」・「民主化」・「都市化」といった、意識されたものとしてであれ、自明なものとしてであれ、研究者が設定する 理念としての近代／モダン を内在させる形で構成されてきた。そして、こうした論点は、社会変化の進展によって、人々の生活上の課題としてもいっそう強く意識されるようになるといった循環関係を形づくってきたと考えられる。

では、理念としての近代／モダン に牽引される形で推し進められてきた 意識と存在の絶え間ない還流を目指した運動 の結果として、日本の 近代／モダン は、現時点でどのような状況にあると言えるのだろうか。私たちのごくありふれた日常生活のなかで、意識と存在の絶え間ない還流を目指した運動 としての 近代／モダン は、今もなお力強く息づいているのだろうか。それは、意識すること と 存在すること の間に介在してきた具体的な歴史的状況によって、幾重にも折れ曲がり、疲弊してはいないだろうか。

この企画を通して問いたいのは、理論的・抽象的に加工されてしまった 近代／モダン ではなく、私たちの生きる歴史的現実のただなかで、まさに今も息づいている 近代／モダン の姿であり、理念としての 近代／モダン とその実現結果との関係である。「疲弊する 近代／モダン」という視角を設定することによって、身近な諸現象の歴史的様相をどこまで解明できるか。それが課題である。